

研究・調査報告書

分類番号	報告書番号	担当
A-151	14-081	滋賀医科大学社会医学講座公衆衛生学部門
題名		
Alcohol consumption patterns and cognitive impairment in older women 高齢女性のアルコールの消費のパターンと認知機能障害		
執筆者		
Hoang TD, Byers AL, Barnes DE, Yaffe K		
掲載誌		
Am J Geriatr Psychiatry. 2014 Apr 26. doi:pii: S1064-7481(14)00136-5. 10.1016/j.jagp.2014.04.006. [Epub ahead of print]		
キーワード		PMID
認知機能障害、アルコール、認知症		24862680
要旨		
目的： 超高齢の成人でのアルコール摂取量の変化と認知機能障害のリスクの調査はほとんど報告されていない。		
方法： 65才以上の1,309名の女性の前向き研究において、飲酒量は繰り返しの訪問で評価され、16年間のアルコール摂取量の変化の平均が推定に使われた。臨床的に重要な認知機能障害（軽度認知機能障害と認知症）は20年後に評価された。		
結果： リファレンスグループ(アルコール摂取がわずかに減った[0-0.5杯/週]グループ、全体の60.4%)と比較し、飲酒量が増加したグループ(5.0%)は認知機能障害との関連は見られなかった(オッズ比[OR]: 1.00, 95%の信頼区間 [CI]: 0.54-1.85)。一方でこの期間に0.5杯/週以上の飲酒量が減少したグループ(34.5%)は、認知機能障害との関係がみられた(OR: 1.34, 95%CI, 1.05-1.70)。年齢、教育、糖尿病、喫煙、BMIと身体活動を調整すると、関連は弱まり、統計学的にはかろうじて有意であった。		
結論： 90歳代~100歳代でアルコール摂取量が減少した女性は、認知機能障害のリスクのある可能性があることが示唆された。		